

8. 局所進行子宮頸部腺癌の根治的放射線治療成績

宮坂 勇平, 吉本 由哉, 野田 真永
村田 和俊, 大野 達也, 中野 隆史
(群馬大院・医・腫瘍放射線学)
小此木範之 (放射線医学総合研究所病院
治療課)

山田 勢至, 横尾 英明
(群馬大院・医・病態病理学)

【背景と目的】 子宮頸部腺癌, 特に胃型腺癌は予後不良であることが知られる. 根治的放射線治療を施行した子宮頸部腺癌の予後を病理学的解析も加え検討した. **【方法】** 群馬大学医学部附属病院で2007年~2014年に根治的放射線治療を施行した子宮頸部腺癌24例を対象とした. 治療開始前生検のHE染色標本をWHO分類第4版(2014年改訂)に基づいた病理診断を行い, 放射線治療予後との関連について後方視的解析を行った. **【結果】** 年齢は29-81歳(中央値59歳), FIGO IB/IIA/IIB/IIIB/IVA期が1/1/11/8/3例であった. 観察期間中央値は50.4か月, 4年全生存率は77.3%, 局所制御率は67.9%, 無病生存率は50%であった. 24例中20例で化学療法が同時併用された. 通常型内頸部腺癌が18例, 粘液腺癌(胃型腺癌)が1例, 漿液性腺癌が1例, 腺扁平上皮癌が4例であった. 通常型内頸部腺癌とその他の4年全生存率は76.5/80%, 局所制御率は61.1/16.7%, 無病生存率は70.6/53%であった. **【結語】** 子宮頸部通常型内頸部腺癌は根治的放射線治療により, 比較的良好な治療成績を示した.

〈一般演題 (肺癌)〉

座長: 工藤 滋弘
(埼玉県立がんセンター 放射線治療科)

9. IV期肺癌 オリゴ転移に対する放射線治療

永島 潤, 北本 佳住, 長島 春香
伍賀 友紀, 上原 宏
(高崎総合医療センター 放射線治療チーム)
清水 雄至, 茂木 充 (同 呼吸器内科)

【背景】 少数個の遠隔再発/転移の場合, 局所治療を加えることで長期生存が得られる症例を経験する. **【目的】** 当院で根治的放射線治療を施行し, 長期生存が得られているIV期肺癌症例を調査した. **【症例】** 症例1: 64歳男性. 非小細胞肺癌(未分化癌) cT3N2M0 stage IIIA に対してCCRT施行. 10か月後に単発脳転移が出現しSRT施行. 4.5年無病生存中. 症例2: 54歳男性. 小細胞肺癌 cT3N2M0 stage IIIA (LD) に対してCCRT施行. 20か月後に単発脳転移が出現し局所SRT+PCI施行. 4年無病生存中. 症例3: 71歳男性. 診断時に単発脳転移を有する非小細胞肺癌(腺癌) cT2bN2M1b stage IV. 原発巣はCCRT, 脳転移はSRTで治療. 3.5年無病生存中. **【結語】** IV期肺

癌であっても, 単発脳転移のオリゴ転移であれば局所治療を加えることで長期生存が得られる可能性がある.

10. 肺癌に対するIMRTの初期経験

永田 和也, 池田 一
(館林厚生病院 放射線治療科)
篠原 彩花 (同 医療技術室)
審良和香代, 小野田 唯, 根岸 利公
松井 卓朗 (同 中央放射線室)

【目的】 肺癌に対するIMRTの初期経験を報告する. **【方法】** 2015年12月以降当院において肺癌へIMRTを施行した全5例を対象とした. 全例で3次元原体照射の治療計画も立案し線量分布やDVH評価などを検討しIMRTの有用性があると判断して治療とした. **【結果】** 5例の内訳は2例が非小細胞肺癌への寡分割照射, 2例が非小細胞肺癌への通常分割照射, 1例が小細胞肺癌への化学放射線療法であった. 治療計画・検証, 治療の遂行に大きな問題は認めなかった. 少ない症例数ではあるが, 経過を観察できたなかで明らかな有害事象の増加は認めていない. **【考察】** 今後更なる症例を積み重ね肺癌のIMRTの有効性や安全性についても検討していきたい.

11. Propensity-scoreを用いたI期肺癌に対する定位放射線治療と炭素線治療の比較

阿部 孝憲, 齋藤 淳一, 小松秀一郎
白井 克幸, 中野 隆史
(群馬大院・医・腫瘍放射線学)
大野 達也 (群馬大・重粒子線医学
研究センター)

【目的】 Propensity-score (PS) を用い患者背景を揃え, I期肺癌に対する定位放射線治療 (SBRT) と炭素線治療 (CIRT) の成績の違いを検討する. **【方法】** 当院にてSBRTを施行した32例, CIRTを施行した62例に対し年齢, T因子, 一秒率などを因子としてPSを算出し, PSmatch後の2群の累積局所制御率, 全生存率を算出し, 検定した. 各群の死亡例の背景や死因を詳細に検討した. **【結果】** PSがmatchした25例ずつの集団を作成した. SBRT群とCIRT群の2年局所制御率は77% vs 91% ($p=0.028$), 2年全生存率は74% vs 95% ($p=0.017$) であった. SBRT群死亡例は9例で5例が原病死(局所再発4例)であった. CIRT群死亡例は3例で1例が原病死(局所再発)であった. **【結語】** PSを用いて異なる治療法の成績の違いを患者背景を揃えた上で解析することができた.